

# IMA J ニュース

## NO. 4

### 国際MRA日本協会機関誌

発行年月日 昭和50年10月25日(毎月1回)  
発行所 国際MRA日本協会  
発行者 柳沢 錬造  
(非売品) TEL. 03-374-7600

INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

## SONG OF ASIA



よみがえる

アジアの精神文明

戦争と苦しみ、貧し、飢え、汚職と憎しみ、それだけがアジアを代表する声であってよいのだろうか。

世界の主だった宗教の発祥の地であるアジア、何千年の文化に支えられているアジアの真価は、怒濤のような物質文明の貪慾の前にその光を消されている。アジアの心の奥にひそんでいる声は何であろう。その声に耳を傾けよう。アジアは何を語ろうとするのであろうか。明日の世界の希望となるものが見出されるだろうか。

「アジアの歌」は歌と寸劇で、アジアの心を訴えている。傲り高ぶる心は社会を混乱させ、文明の崩壊に導びくことは歴史が語っている。「歴史からは何も学べない」と故人は言ったが、そうであってはならない。謙虚に学ぶ姿、そうして、心の内にひびく声に耳を傾け、正しさを勇気を以って実行すること、これがアジアの特質であろうか。

スイスのコーで開かれたMRAの夏期大会で、日本の青年五名を加えて「アジアの歌」は参列者に多大の感銘を与えた。今は各国からの招きに応じてヨーロッパを歴訪している。

ドイツに続いてデンマークに行った。

デンマーク第二の都市であるアールスは大学の町でもあって、「アジアの歌」はまずここで上演された。

「素晴らしい。心をゆさぶる力を持っている。平和を望むアジアの人々の切なる訴え、人間の動機にメスをあて、正しい社会をきこうという若人たちの勇氣と理想とは賞讃に価する。誰かがどこかで始めなければならぬものである」と新聞は書いた。大学の教授の一人は劇を見たあと、「ヨーロッパ人の心は病んでいる。開発途上国のことを考えると良心がいたむ。食事をしながら、不足に悩む人たちを考えると喉を通らない。人類に共通の目的が必要だ。」としみじみ語った。

次の招待国ノールウェイでは十七校の四千人の学生の他に国の指導的立場の人たちの前で上演した他、ラジオ、テレビを通して大衆によびかけた。「アジアがそれ程身近かではない北欧のノールウェイに与えた精神的衝撃は今後大きな波紋を広げることであろう。」「キリスト教以外の宗教を信じる人たちとの直接な話し合い、偏見を取り去り、人類共通の目的に向って理解し合おうとする芽ばえが、アジアの青年たちの真心を通して生れたといえるだろう」とノールウェイから報じてきた。イギリスには三月月滞する予定で、スコットランドの公演はすでに終り、十一月十二日から二十九日まではロンドンのウエストミンスター劇場で上演する。



# 一笑一少一怒一老

信路

## 中華民國・台湾MRA (道德重整) 大会

常任理事 西川四郎

室を確保してもらおう。

ここを滝、山崎両理事及び私と、三人屯ろして大会の連絡場所とする。

十月九日、MF(マレーシア航空)八四一号機にて、東京羽田空港を午前十一時に出発、午後一時三〇分、台北飛行場着、詹紹華さん、劉文石さんから台北師範同学の皆様の出迎えを受ける。張群先生の女婿に当たられる劉航榮先生のお出迎えを戴くが、飛行機延着のためお会いできず。

国賓飯店に詹紹華さんの車で案内していただく。明日の双十節を控え、日本、南方から一万七千名に及ぶ華僑が乗り込んで来ているとのこと、日本人の観光客も日に二千に達するという。特に本年は光復三十年を祝って、大変な賑いである。

台北師範同学会の会長、許金徳先生の経営になる国賓飯店(アンバーサダー・ホテル)

さえ、許社長が海外出張中でやっとな特別に詹さんに、頼んで一

う意味であろう。美しい音頭を踏

んでいる上に簡単な文字の中に、人間の一番大切な道徳律が歌いこまれている。怒った顔をせず、全世界が笑顔で接するようなムードを造ること、それがMRA運動ではなかるうか。「桃李も

の言わず、自ら徑をなす。」この家にはしっとりとした桃源境の趣がある。私はこの国の文字の持つ美しさに全く驚ろかされる。いずこを見ても美字麗句、礼義廉恥、万物静観皆自得、四時佳興与人同、美しく清い言葉が国民の進むべき方向を示唆している。

ことばが国民に及ぼす影響は大きい、仮にMRAにしても、中国の訳語は「道德重整」である。従来からある中国伝統の道徳の上に新しい感覚をもって、国際的な道徳を加味して、新旧良質の道徳を整えていこうとい

「一度笑えば一つ若くなり、一度怒れば一つ年を取る」とい

が掲げている。

うのである。温古知新の深い味があり、誠にその意味深く、簡にして要を得た訳語であり、道徳運動のスローガンとしても重厚さがある。

それにひきかえ、日本の道徳再武装とは余りにも直訳的で、しかも五字の長さは、前者の道徳の二字が消えて、再武装の三字のみ深く印象に残る。日本において憲法第九条の手前武装ということばは禁句でもあり、また、余り使いたくない言葉でもある。MRA日本協会においても当然、道徳再建、道徳創造、道徳重整、等何かすばらしい標語を決定する必要がある。広く天下の会員から新味のある標語を募集したいものである。

張群先生は、本年八十七歳を迎えられ、なかなかお元気で、日本語のお上手なこと、語彙の豊富なこと、上品な語調、日本人さえ及ばない程の本質的な美しさをもった日本語をお話になる。日本に対する愛情の深さが先生のことばの中から感得される。風貌もまた日本人、中国人を超越した東洋の大君子を見る思いがする。堯舜禹湯もかくやと思わせられる風格がある。この面相は孫文、蔣介石、張群

と続いた超一流の東洋の顔である。

先生は六十八年前に日本に留学され、明治、大正、昭和と日本の激動の流れと、民国元年、北伐成功後の中国の歴史の中に、蔣介石總統と共に戦って来られた中国民族解放の闘将である。温容せまらざる中に馥郁と香る磨き出された人格の発露は、「達人自然を仰ぐ」の風格がある。

藍蔭鼎画伯の描く張群先生のお庭の絵はすばらしい。その庭に降り立ち、記念撮影をする。絵画、書、花瓶、彫刻等調度の逸品をいろいろと御説明下さる。宋美齡夫人の書かれた絵画に蔣介石の題字がある山水画は本格的である。

蔣介石總統の死後、微動だにしない中国の存在は、張群先生の長老としての重さが大きく影響しているものと思われる。先生との話しは尽きない。清新発刺として六十代の年齢としか思えない。現代の生き残りの世界的人物の一人である。

八十七年の人生を歴史の中に生きて来られた張群先生、栄枯盛衰の中に生き、国民の師表として生き続けることは容易なこ



左から 山崎房一・劉毓榮教授・本郷富士子・張群先生（政府最高顧問）・劉夫人・相馬雪香・西川四郎・スタカクーマ議員（ラオス）・バンドン氏（オーストラリア）・滝真次郎

とではない。中国の人達は恐らく先生の面影に接するだけで安堵感を覚え、政治の根底に道德の土壌があることを感じとってゐるのではなからうか。たまたま私共日本人が先生のお話しを

うかがうだけで、大湖の中に船を浮かべ語りの中に、柔和な心情が満ち溢れ、担々として語られる先生の話の根底に深い人生の哲学があり、しかも強いバイタリテイが感じられる。

王道楽土というものは民生が安定し国民が安心して生活していけるといふことであろう。鼓腹撃壤、国民の憂いをもって憂いとしている理想郷がこの華麗島の中には満ちている。勿論、どの国にも悩みはあろう。中共との問題、若者の間から世界はなぜ台湾を国連から締め出したのだらうかとの疑問が提示された。

中共と台湾の問題は、血液を共にする同胞の間の問題であるし、主義主張の違いとも言えよう。第三者の日本などが、この問題に介入すべきものではないと思う。日本としてはどこまでも、蔣總統の終戦時の「仇に報ゆるに徳を以てする」の恩情に對して、我々日本人は報いていくことが人の道であり、また信義ある外交の道でもあろう。中共問題に對して、同学の先輩、許金徳氏は「一たす一は二には違いないが、日本人というのはいつでもこのように割り切つてしまわないと納得しない国民のようである。人生には割り切れない、余りの出る答えもたくさんあるのではなからうか。中共對台湾の問題は両者の話し合いの問題で、時間がくれば、い

れ解決するものである。」というのである。言い切つてしまえばそれだけの問題で、含みを持たせて解決すべきことである。ただあらゆる面から省みて日本の現状を見れば、色々と考えさせられることが多い。

台湾の大学生はMRAの大会において、一人として煙草をすうものがない。大方の大学生がそうなのだという。つまらないことではあるが日本の大学生では考えられないことである。ましてセックスの問題など、ほとんど起こっていない。

この台湾の在り方は我々日本人として大いに参考にすべきことであるし、過去の日本とは違つた道義を中心とした台湾の存在は東洋の道義的燈台として大いに注目すべきものがあると思う。終戦後我が国ではミリタリズムの崩壊と共に自由の風潮は全国を風靡している。

節度なき自由ほど恐ろしいものはない。日本全国与えられた自由の中で自由の女神の恩恵に浴し過ぎてその跳梁の中に呻吟し喘いでいる情態である。

陽明山の近く華岡の中国文化学院大学で中国道德重整大会が催された。

劉先生の開会の辭に始まり、張群先生の祝辭、大學設立者の英語の演説があつた。

日本の代表として相馬先生のスピーチ、イギリスのシンプソンさん等の話があり、寄宿舎の食堂で昼食の接待を受け、午後ミーティングに移り、若い青年達の意見を聞く。

淡々として各青年達はそれだけの意見を積極的に述べる。

青年らしい、理想に燃えた主張が飛び出し意気盛んなものがある。

それに引き換え、日本の青年達はどうなるのであろうか、日本の青年が全て道義を捨てて勝手なことをするだけとは思われない。

ただ空虚な道德論だけではどうにもついていけない何かがあるのである。しかし、日本の青年の中にも清く高き理想に燃える多くのライジングゼネレーションのあることを信じて疑われない。

それだけに日本の大人がしっかりしなければならぬと思う。

私としては、大正十五年から昭和二十一年四月まで、正味二十一年間、台北師範、台北帝大を通じて交友を重ねた多くの中

国の人達との交流は、それがとくに感じ易い、多感な青年時代であっただけに、ここ台湾は第一の故郷というべき懐しさを感ずる。

明治、大正、昭和と五十年に亘り、私の台北師範学校の卒業生は数千にのぼり政財界、教育界に活躍しているのであるが、これら先輩、同輩、後輩の中に誰一人としてMRA運動の本年度の総会に出席したものがいないのは寂しい限りである。

ここに私は台湾MRAの運動のエアポケットを見るのであるが、反面若き学徒、青年達の熱心さは、日本において大いに参考にすべきことで、若き台湾の

## 台湾で学んだこと

山崎房一

MRAの同志の動向は、私に大きな希望を与え、限りなき混迷の中に悩み苦しむ青年達に呼びかけ、新生日本の光りとなり、新しい日本の発展に寄与する青年達に呼びかけたいものである。私は最後に若き台湾の絶対無私、絶対純潔、正直、愛の四つの柱を通して活躍せられる姿から日本MRA協会の動向に対して大きな啓示を与えて下さったことについて深く感謝する次第である。

これからは若い世代の世界である。世界の若者が手をつなぎ合うべきなを作り上げたいものである。(昭和五十年十月廿日) (全日本私塾協会会長)

## MRA青年講座開催のお知らせ

本協会では国内的、国際的な人材を育成するため左記の要領で毎月一回青年講座を開講いたします。

本講座は、自分達の住む社会をより良くし、また、世界に何等かの貢献をしたい、自分の人生を有意義に送りたいと願う青年、学生を対象とします。内容は、国内外の政治、思想、経済、教育等各般に亘り、各界の学識者、専門家の講義とそれに基づく質疑討論を通じ、国際社会に対する日本の役割と我々一人一人の使命をあきらかにすることです。皆様から青年学生達にぜひ参加するようおすすり下さい。(受講申込みは当協会にお願いします)

## 第一回 MRA青年講座

一、場所 千代田区駿河台一ノ七 (電話 二九一〇七七五)

二、日時 十一月十四日・午後六時より八時三十分

三、演題 国際MRA運動の歴史と日本のMRA運動

四、受講料 千円(食事代をふくむ)

真暗闇のあちらこちらにめらめらと火が燃えて、時々火花のようにパッと明るくなった。私は身体を振って顔がガラスにくっつくぐらいにして窓外を注視した。機内アナウンスがダナンの上空を飛んでいることを知らせている。

一昨年の一月、インドのMRAアジア大会に行ったときのことである。赤く焼けた熔岩が流れたように、あれからの東南アジアは激変してしまった。また、どこで火山が爆発して真赤な熔岩を吹き出し、それが一国を飲み込み、思想、言論、職業、旅行などの自由を奪い完全に統制された国に変身させるかも知れない。

カンボチアのプノンペンの街はペンペン草が生え、街に住んでいた人々は荒野に強制的に移住させられ、農器具が無いので手で土を掘っていると最近の新聞は報道している。一つの国が潰れていくその悲

必死だ。

不況と云っても羽田を飛び立つ観光客の物凄さ、それにしても日本人は実にのん気だなあ、などと思いをめぐらしていると、まもなく台北飛行場に到着するからベルトを締めるようにというアナウンスがあった。十月八日である。

私たち一行は本郷、住友両夫人の三名で、相馬雪香先生はすでにAPUの会議でここに来ておられる。

西川四郎先生一行は九日に到着される。

中国最後の国連大使で今は中国文化学院大学で教鞭をとっておられる劉先生夫妻とMRA青年チームの数名が飛行場で迎えて下さった。YMCAとYWCAにそれぞれ宿舎が用意されていた。

劉先生は「MRAで訓練を受けた青年達のグループ・シンング・アウト」が台北や台中など全国にあります。それらは青年達の自発的な運動で、青年達は絶対正直、純潔、無私、愛の四つの標準を日常生活に実践し、静かに内なる心の声に聴き、それをお互いに話しあつて「何が正しいか」を基盤にして運営して



シンプソン一家

「私たちは過去のつぐないをするためと、新しい国づくりのお手伝いに来ています」

います。そして、十一日に開催されるMRA全国大会も青年達の手ですべて準備がされています」と話された。

十一日、台北市郊外の丘の上にある中国文化学院大学の大講堂で午前九時から大会は開催された。ここは東京麻布のMRA

ハウスに永く居られたアメリカ人のアレン先生が最近まで歴史を教えておられたところでもある。

劉先生の開会の辞が続いて大学の総長張其均先生が東洋哲学とMRAとの密接な関係と教育に於けるMRA精神の重要さ

を話された。

中国政府最高顧問である張群先生は「激動する世界に於てアジアの国々は協力し団結すべきであるが、それはMRA精神に基づくものでなくてはならない。

人類にとつてMRAの永遠の価値は人々に道徳標準を日常生活で実践することを教えるからである。MRAはただの反共ではない。共産主義を生む社会の根本問題にMRAは回答をもたらそうと努力している。そのため、に国の基礎となる私心の無い、偏見から解放され、自分の信念で生きてゆく、信仰をもった新しい型の人間を育成している。それは苦悩する今日の世界が最も必要としている人物でもある」と述べられた。

全国からこの大会に参加している学生達の顔は明るくて服装は清潔できちんとしている。

高君は昼間は印刷工場で働き、夜はこの大学で印刷工学科で学んでいる好青年だ。上手とは云えないカタコトの日本語を使って一生懸命通訳し、私たちに何とか不自由をさせまいとする心使いの溢れている温かい態度に感激した。思いやりには国境は無いものだ。

このMRA青年グループを世話している魏君は「全国の青年達が手をつないで道徳的な新しい国づくりをします」と確信を述べていた。

オーストラリア、ニュージーランドからも来ている。英国から夫人とお嬢さんの三人で出席しているシンプソン氏は「英国はアヘン戦争を起し領土を取り、人々を搾取してきました。英国民の一人として非常に申し訳けなく恥かしく思います。私達はそのつぐないをしなければなりません。皆さんが道義をもとにした国づくりをされる、そのお手伝いに来ました」と話される飾り気の無いけんきよな態度に、私は日本人として深く反省させられた。

日本や日本人についてどう思うか、という質問に対して、学生から「利己的だ」という卒直な意見が返ってきた。

「台北空港には団体の観光客をふくめて毎日、二、三千人の日本人がジャンボ機でピストン輸送されている」と台北旅行社のマネジャーが帰りの座席の予約しに行った私に話したのを思い出した。この数千人の日本人のうち幾人の日本人が高君のよ

うに相手の国や国民のことに思いやりを持っていろいろののだろうか。西川先生は「中国の青年達がどのようにMRA精神で国づくりに頑張っている。教育者として次の世代になう大切な日本青年の教育のために、特に何が正しくて、何が間違っているかの判断力をつけさせるためにMRA精神で、世界の役に立つ人材の育成に取り組む」という決意を語っておられた。

空港に見送りに来た王青年は「来春、全国MRA青年大会を開催します。日本からぜひ青年達多数が参加して下さい」と私の手を堅く握って言った。

「MRA精神を日常実践する日本人はどこへ出かけても、その国や世界が新しく生れ変わる大きな力添えになるだろう。反面、私利私欲にみちた日本人、自分以外のことには無関心の日本人は、あの南ベトナム政府の悲劇の原因となった他国の道義的退敗と国の崩壊を助長する無責任な者となろう。悲しいことだ」と一緒に行った滝さんが云った。

今日も羽田から腹いっぱい日本人を飲み込んだジャンボ機が世界各地へと飛び立っている。

(終)

# 私とMRA

## 寒河江 善秋

私がMRAと逢ったのは昭和二十八、九年ごろであった。昭和三十年にスイスのコーでひらかれていた世界大会に参加し、帰国してから、一、二年MRAに関係を持ち、日本青年をマキノに大量に派遣するプロゼクトにもかわりを持ったが、その後次第にMRAの活動に疑問を持つようになってMRAから離れてしまった。しかし、コーの大会で心にきざまれたMRAの四つの絶対標準はいつも心の支えであったし、社会を変えようと思つたらまず自分から変れようというブックマン博士の教えは、私の脳裏から片時もはなれることはなかった。

数年前にいままでのMRAとは別にジバと名づけたMRA関係者のあつまりができ、何度かさそわれて出席するようになってから、私のつたつた一人のMRAは終わった。ことにかねて尊敬していた柳沢錬造さんと相馬雪香さん、加藤シヅエさん、

鶴田重蔵さん、本郷富士子さん山崎房一さん等らが中心のメンバーであることに強い信頼と共鳴を感じた。

正式に国際MRA日本協会として発足してから何度かのあつまりがあり、その話し合いのなかで感ぜられることは、以前私が関係していたころとフニイ気が全く変つていることである。

MRAの成長というべきか、関係者がみな年をとつて人柄が老熟してきたためか。

つどいには、かつてなかったやすらぎとあたたかさがあり、いつも散会して帰るのが惜しいような気持である。

絶対愛とか、絶対無私とかいながら、あのころはいつも人を責めるようなおしつけがましいトゲトゲしい空気が流れていて、私のように気の弱いものはしばしばいたたまれない思いをしたものである。

著名人ばかりをチャホヤするような特権社会風な空気もいや

だったし、国際的／＼といつても外国の方ばかりみて、足もとの地道な活動がないのも不満だった。

四つの絶対標準も大切だが、少しでも立派な生き方をしようこれ以上悪い生活はしまいと努めている善良な庶民に縁がないような運動では仕方がないと思つた。

案の定、ひところのMRAにはただで外国旅行をしたり、有名人と交際することにだけ興味をもつような（或は私もその一人であつたかも知れない）野心的な人々が群がりあつて来た。

今度、改めて再建されたMRAは過去のそのような誤りを反省し、MRAの原点にもどつて再発足したものであると、私は信じている。

標準は絶対でなければ意味がないことは十分に知っているが、やはり、できるだけ正直に、できるだけ愛をもって、できるだけ純潔に、できるだけ私心なく生きたいと願う平凡な人々がMRAを道義的コミュニティとしてあつてくるようになってほしいものである。

少くとも、絶対無私をいいな

がら、その反対の生き方をするような偽善者の集団であつてはならないと思う。

以前にMRAに深く関係していた友人に、新しいMRAへの参加をすすめた時、その人は顔をしかめて断つた。

「私は一度も二度もつまづいた人間だからとても参加する資格はない」とその人は言つた。

この世の中につまづかない人間などいるだろうか、何度も何十度もつまづきながら執念ぶかく立ちあがつて、正しい人間の道を歩もうと願いつづけることがMRAなので、そうでないMRAなど必要ではない。

私たちは、どんなに努力しても神のようになれるわけではない。しかし神のようになろうと努力しつづけることは誰にでもできる。

そういう人が一人ふえれば、その分だけ社会が変わる、二人ふえれば、二人の分だけ社会が変わる。つまづきをくりかえしながら、その一人になろうと努力するのがMRAだと私は考えている。

地上に人間が一人しかいなかったら道徳など必要ではない。一人一人が好き勝手な生き方

をしたのでは社会はなりたない。

そうかといつて、権力でいやおうなしに規則を守らせられるというのも情ない話である。

国が一人一人の生き方を規制するのでなく、一人一人の生き方が国のあり方を律するのが正しい。

そうであれば、国民一人一人の生き方が国をよくもし、わるくもする。

自由で清潔公正な社会を実現したいなら、社会を構成する一人一人の個人がそのように生きなくてはならない。

日常の具体的な生活実践を通じて、世界を変えようとするMRAの活動は誰でもできるが、同時に誰にでもできるというものではない。

私はこれからも何度もつまづきながらMRAの卒伍に加わっていきたく念じている。(終)

### 訂正お知らせ

前月号八頁見出しのチュン・ジュン先生のジュンの漢字は、**椿** が正しいので謹んで訂正致します。